

九州50年よもやま話

内藤, 莞爾

<https://doi.org/10.15017/2338945>

出版情報 : 九州人類学会報. 30, pp.1-3, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

《九州人類学会報30号記念特集(1)
—九州人類学研究会の30年を振り返って—》

九州50年よもやま話

内藤 莞爾

I. 九州以前

九人研には、私は発足当時からの会員である。いや発起人のひとりであった。しかし顧れば、どうも熱心な会員ではなかった。記録の類も散佚しているし、記憶もおぼろげである。それでここでは、九人研のこととは別に、私をとりまいて九州で起こったこと、それに関連して、民族学（人類学）について、思いつくままに綴ってみたい。

1. 民族研究所のこと

私は、1950年、神戸大学から九州大学に移った。そして定年で九大を辞めて、8年間を東京の立正大学で過ごし、また九州に戻ってきた。以後、久留米大学その他で非常勤講師を務めたが、今は浪々の身である。終生、社会学が看板だが、ただ3年間だけ、民族学で給料を頂いた。民族研究所の3年間がそれである。日中戦争から世界大戦へと、東亜民族に関する知識が求められるようになってきた。こうして1942年、文部省の外局のような形で民族研究所が発足した。幸い私は助手に採用され、お蔭で兵隊を免れ、中国の南部からインドシナ半島に住む諸民族の研究に従事した。黎族の住む海南島の調査をすることもできた。当時の大学には、民族学や文化人類学の講座は皆無であった。勢い研究所のスタッフも、2、3の専門家は別にして、関連・隣接の学問から選ばれることになった。やや組織をなしている団体に日本民族学会と民族学研究所

があったが、学問としては、民族学以外、社会学・東洋史・宗教学・民俗学などがそれである。所長の高田保馬以下、所員に岡正雄、古野清人、小山栄三、江上波夫、牧野巽、八幡一郎、関敬吾、杉浦健一、助手に及川宏、鈴木二郎、内藤莞爾、等々。こうした顔触れなので、いま「日本民族学会」の理事などを務め、その看板を「日本文化人類学会」に塗りかえようとしているお歴々など、まだ「ご幼少」で、出る幕がなかった。

2. 古野清人氏との出会い

民族学研究所は、終戦に伴って解散になり、私は暫く本省の三級事務官を務め、神戸大学に移った。新制大学の発足に伴う人事であって、そこではマリノフスキーに詳しい堀喜望氏とお近づきになった。ただ神戸大学での任期は1年半で、九大に移ることになった。さきに記したように、1950年のことである。私の九大移籍については、複数の人脈があるが、最大は古野清人氏との因縁である。同氏は現在の宗像市の出身、郷土愛のあまり、「神郡宗像」を唱えていた。外交官を志して東大法学部に入学、のち文学部の社会学科に移り、失望してさらに宗教学科に転じた。周知のように、同氏は日本における宗教社会学の草分け的存在。一方、私はM.ウェーバーに学び、1940年、「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」にヒントを得て、浄土真宗の教理のうちに近江商人の経済倫理のルーツを発見、学部

の卒業論文に纏めた。ところがこれが予想外の評判(?)になって、古野氏の知遇を得るたよりとなった。また私は旧制高校でフランス語を専攻したので、語学の点でも、古野氏と一致した。そこで私も、M.ウェーバーを積み残しにして、古野氏に倣い、デュルケムをはじめ、フランス社会学の日本上陸に進んだ。なおM.ウェーバーとは、戦後、彼の「社会学の基礎概念」の訳出で再会した。

II. 九州でのイベント

1. 末子相続の初体験

1961年、九大は「学術探検研究会」(SESKU)をスタートさせた。戦禍も収まって、海外の学術調査も出来そうになった。これに備えて、内地でトレーニングをしよう。これが研究会の趣旨で、とりあえず東シナ海の離党・甌島がその場所に選ばれた。当時、教育学部に吉田禎吾氏がおられたので、相談のうえ、下甌島の一部落を取りあげて、いわゆる community study を試みた。そのときわれわれには、離島からの連想で、トロブリアント島(マリノフスキー)やアングマン島(ラドクリフ・ブラウン)などのイメージがあった。調査の結果は、「離島村落の社会人類学的研究」と題して、『民族学研究』(30巻3号、1965)に報告しておいた。が、とてもマリノフスキーやラドクリフ・ブラウンに及ぶものではない。“explanatory”な報告に終わったが、ただ私としては、この調査のとき、初めて「いわゆる末子相続」に出会った。次男が跡を取ったり、長男が隣に分家したり、三男のところに隠居した親がいたり、等々。もちろん私は、九州の西南部に末子相続の慣行のあることは、民俗学その他の文献で承知していた。けれども関東で育った私には、民法の示す長子家督が既成概念となっ

て動かない。だから次男が跡を取ったり、親が三男のところで隠居していても、これは長子相続の崩れた形ぐらいにしか考えなかった。なおこの調査では、焦点を村レベルの現象に当てていた。勢い末子相続のような、家レベルの現象を掘り下げなかったことが、返す返すも残念であった。

2. 末子相続への取り組み

私の末子相続への取り組みは、川口諦氏の『村落社会研究』誌(1965)所収の鹿児島農家の研究で大きく開眼した。この報告では、家族慣行がテーマに採用されている。当地の農家は、長子家督にこだわらない。だから男子は、成人ととともに家を出ていく。結局、末子の相続になることが多いけれども、しかしそうなるとは限らない。父親の跡は、どの子供が継いでも構わない。いや継がなくてもよい。こうして老人だけの隠居世帯が現われる。つまり鹿児島の農家は、世代継承に関して、一定のルールを欠いている。鹿児島県の人口は、全国一の流出率を示している。それもこうしたルールの欠如が原因である。川口氏は、農業経済学の専攻だが、この論文は、明らかに社会学的である。社会変動の原因を外部の経済的要因でなく、内部の家族慣行に求めているからである。

私はこの川口論文によって、大きく刺激された。ただこの論文は、シャープな構想にもかかわらず、これを裏づける資料が乏しい。こうして私の末子相続慣行の探訪は、天草下島の漁村からスタートすることになった。以来、私の行脚は、西南九州の全域にわたって、10年以上続いた。その間、学園紛争のために空白の期間もあったけれども、学問の灯は、絶やすことはなかった。コースは、五島列島のキリスト教系(カトリックと隠れキリシタン)家族にまで延長された。末子相続を報告した専門書も、4

冊を書いた。自画自賛になるけれども、ライフワークと呼んでよいであろう。

というわけで私と末子相続との関係は、10数年に及んだ。当初はそのアプローチに乱れがあったが、のちは一貫して、次の2点に留意して、この研究を進めることになった。

- (1) 家ごとの特殊事情にさきだって、地域の伝統的な慣行に注目する(対象の側)
- (2) そのために最小単位として「部落」を取りあげて、これに計数的に処理する(方法の側)。

(1)と(2)を合わせると、「社会学的分析」と呼んでよいであろう。もともと末子相続の研究は、フレーザーに発する。『旧約聖書の民俗』(J.G.Frazer, *Folklore in the Old Testament*, vol.II, 1919)がそれである。「創世記」によると、アブラハム、イサク、ヤコブはいずれも弟も、兄を凌いで相続した。そしてフレーザーは、その原因をヘブライ民族の遊牧生活に求めた。遊牧による家族の移動は、兄たちの順次放出を結果し、末子の相続を必然的にする。気宇壮大なロマンである。冒頭に述べたように、私は3年間しか、民族学の祿をはまなかった。しかし末子相続の研究史を遡ると、民族学に達する。浅からざる因縁である。けれどもフレーザー流の古典民族学は、もう今日では通用しない。新しい酒には、新しい皮袋が必要であろう。

付記

紙幅に若干の余裕があるので、次の事項を付記する。題名を付ければ、末子相続の研究が、学界で「知的市民権を得ていった軌跡」

とも言えるであろう。

- (1) 1968. 5 日本民族学会第7回研究大会(東洋大学)

シンポジウム I : 日本の親族組織をめぐって

報告者: 蒲生正男、中根千枝、執行嵐

討論者: 内藤莞爾、竹田旦、竹内利美

司会: 大給近達、高橋統一

- (2) 1970.10 日本民族学会・日本人類学会第24回連合(久留米大学)

シンポジウム: 末子相続と社会構造

話題提供者

1. 民俗慣行としての末子相続 竹田旦(東教大)

2. 不定相続としての末子相続 内藤莞爾(九州大)

3. 末子相続と社会構造 中尾英俊(西南学院大)

4. いわゆる末子相続説の立論に関する疑問点 野口武徳(成城大)

討論会: 有地亨(九州大)、中根千枝(東京大)、松園万亀雄(天理大)、村武精一(都立大)、米山俊直(甲南大)、吉田禎吾(東京大)

- (3) 1973. 2 『末子相続の研究』(弘文堂) 刊行

- (4) 1974.10 文学博士号を授与(早稲田大学第385号)

題目: 末子相続の研究

- (5) 1975.11 西日本文化賞受賞(西日本新聞社)

受賞の対象: 末子相続の研究

- (6) 1976.10 日本社会学会 会長講演「いわゆる西南型家族について」

- (7) 1980. 3 九州大学最終講義「末子相続事始」

—2003. 1—